

# 理 合 ◎ 合 氣 道



ア  
A



イ  
I



キ  
KI

合氣道は一般に体術が主体であると言うことで知られておりますが、その体術の基本的な理は剣よりきていると見て差し支えありません。

むしろ体術的な剣法であり、且つまた剣法的な体術であります。

剣の理と体術の理は合氣道においては混然一体となっている訳で、つまり双方の理合は一致すると云うことが出来ます。

だからと云って、現在行われている剣道と柔道を即座に混ぜ合わせてお考えと間違いになります。

同じ剣を持って合氣道の剣捌きとは似て非なるものであり剣道と柔道を比べ、いずれからも他方を説明することは困難でありましょうし、杖についても同様のことが云えます。

それでは何拠が異なるのかと云うことになりますが、第一に受けた時の体制が裏三角形を取っていること、第二に気をあわせる、と云うこの二点になりますが、この二点こそ合氣道を合氣道たらしめるものであります。

裏三角法と云うのは、例えば右足を前に出した半身の構えの場合、右足の右側に三角形が出来る位置に左足をおくことを云います。

開祖は単に一重身とも云っておられました。

一重身の利は、相手が突いてきても打ってきてもその剣に逆らわず、突くことも打つことも可能にする点にあります。

第二の気を合わせると云うことですが、合氣道には突ける時も突かず、打てる時にも打たずに気を合わせる稽古法があります。

合わせ法、

組太刀、組杖は基本形に従って動きますが、総て気を合わせる稽古法です。

基本形が身につけば咄嗟の場合にも、自然に応用技が出てくるものと考えられています。

これを試す目的で試合を行うことは、非常に危険で、何となれば合氣道において試合と云う場合場合には、真剣勝負を意味するからであります。

若し一定のルールを設け、試合を行うことにしたならば、危険と見られる技は認められず技の範囲はせまくなり合氣道本来の目的をも見失うことになりましょう、それは又、スポーツ競技となることおも意味します。

現代武道が真に、平和を求め、愛の精神を、示すものであればある程、きびしい過程を経なければならぬのが武道の世界であります。

しかも、その厳しさの中に道を求め美しい人間関係を維持する喜びは、修行者に与えられた特権とも云い得よう。

徒手稽古に限らず剣・杖を持った稽古、その厳しさを一層増大させるであろう。

剣・杖・体術の一々の理合については、稽古を多くして身体でおぼえて理解していただきたいと思ひます。

剣・杖・体術のそれぞれの何拠に共通点があるかと問われれば、

「総て共通している」と云うことになってしまいます。

どうぞ皆さんご自身で研究錬磨を積まれることを切望いたします。

合氣道において剣・杖を持つことは、以上述べてきた理合を知る事の他に、剣を持って剣に頼らず、杖を持って杖を意識しない“武器に頼らざる心、技・体を造り上げることになるとしんじます。

一日の稽古と云えどもおろそかにせず、氣を練り、体を練り、心を練り、合氣道精神を涵養していきたいと念願する次第です。